

「包容」

— 親から中学生の子への言の葉 —



「わたしのうた」「あなたのうた」

いつか思い出してくれるような「わたしのうた」を残したい！なんて、子守唄とか歌っていたけど、いつしか歌ってあげる余裕もなくなり、悪いなあ、なんて思っているうちに、いっしょに歌えるようになっていた。「ちゅうりっぷ」が「世界中の子どもたち」になり、「ふるさと」になって、『嵐』なんかになっていく。うちは歌には縁がない家系だったから、合唱部に入ったときはびっくり。歌が好きというだけあって、部屋から風呂場から鼻歌がいつも聞こえる。あなたの笑顔が音符になって広がる。それに合わせて歌うのは楽しい。「わたしのうた」は「あなたのうた」に重ねるぐらいでちょうどいいみたい。

これからの生き方がうたになる。楽しい歌、強い歌、悲しい歌。すべての経験が吸収され、「あなたのうた」を創り上げていく。



いつもの朝

いつもの毎日が始まる朝の時間、目覚ましが鳴って三回目ぐらいに起き
てくる。

「おはよう」と声をかけ、娘の顔を見る。

眉間にしわのいつもの表情。

はつきり返事もしないままに、新聞のテレビ欄チェック。トイレ。朝ご
はん。洗顔。歯磨き。目はテレビに向いたまま、着替えてかばんを背負っ
て……八時五十三分。

「スカート忘れてるよ！」

「あぁ、だったぁ！」

今日も元気に登校。見送りたいのに、見送らないでと言いだしたあの日
から、もう何日も過ぎたけど、玄関の扉の向こうには、もう一人のあなた
が頑張ってる生きてること、母の最大の喜びです。応援してるよ！



あなたへ

もし、前世があったとしたら、間違いなく私たちは親子だったと思うよ。もちろん、あなたがお母さん。

なぜかと言うと、小さいあなたに肩にもたれた時、とても安心感をもったんだ。不思議だね。

私たちはよくけんかをするのね。似た者同士なのかな。

あなたに「子供っぽい」と言われると、「確かに…」と思う。でも、ゆずれないお母さんがいるからムキになる。

月日が流れて、いつか「私は、お母さんに似たのかな」と、言ってくる日を、今から母は楽しみにしています。



見送り

「行ってくる。」

かばんを背負って一回、靴をはき終えて一回、玄関を出て一回と。それから、駐車場の角で振り返り、手を高く上げる仕草。そして、見えなくなる。朝は、こうやって学校へ出かけていく息子を見送るのが日課だ。

時には、振り返らず。時には、二回も振り返ったりする。その姿を見ると、私に伝わってくるものがある。楽しいこと、辛いこと、悲しいことがあるのだろう。

こちらが見送っていると思っていたが、逆に、振り返ってくれているんだ。私のほうが、励まされて元気にさせてもらっていると思える時もある。

言葉には表さなくても伝わってくるよ、こころの言の葉。

「今日も元気で、行っておいで。」



勇気と希望

あなたには、生まれたときから宿命がありました。五歳違いの障害を持つ姉がいるということ。そのことをあなたはどうか考えているのでしょうか。

お姉ちゃんは、特別支援学校の高等部三年生。普通なら花の女子高生。おしゃれの先輩であり、学校のことや友達のこと、いろいろあなたにアドバイスや相談に乗ってくれることでしょう。でも、お話もできない姉を、そろそろ思春期のあなたには、恥ずかしいと思う時もあるでしょうね。お母さんは、それでいいと思います。お母さんだって、お姉ちゃんに障害があると告知された時、絶望して、人からジロジロ見られるたびに恥ずかしいと思いました。でもね、あなたを授かった時、次の子に障害があるかなかろうが、すべてを受け入れる覚悟ができたの。だから、あなたは、お母さんに勇気と希望を与えてくれた、かけがえのない命なのよ。



強さと優しさ

辛い日が続いたよね。何故、学校に行きたくないのか、自分でも分からない日の連続で、苦しかったよね。

お母さんも、そんなあなたを見るのが辛かった。

だって、学校、大好きだったものね。

でも、ある日、いじわるをした同級生に対して

「そんな悪い人たちじゃないよ。」

とあなたが言った時、どんな子よりもあなたが強いことを知りました。そして、優しいことも。

一年間辛かったけれど、その間、いろいろなことを考え、学んだんだね。

ありがとう。私はいつもあなたから、強さと優しさを教えてもらうね。

でも、本当にきつい時は、弱音を吐いてもいいんだよ。いつでも、全部、受け止めてあげるからね。



あなたのおかげ

二人だけで暮らすようになって、十年が過ぎました。なんとかここまでやってこられたのは、あなたの笑顔のおかげです。仕事で疲れてほほえむことを忘れてしまいそうな時、あなたは私にじっくりと笑いかけて、

「そんなこと、明日やればいいじゃない。」

と、自分を緩めることを教えてくれました。小さかったあなたが、いつの頃からか、私を抱きしめてくれるようになりました。今まで、周りをゆっくり見渡す余裕もなく、ただがむしゃらに突っ走ってきた私を、いつしかこんなに、ほっこりとさせてくれるまでに成長したあなた。二人でも、笑いの絶えない温かい家なのは、すべてあなたのおかげ。一緒に過ごせることに、いつも感謝しています。



十五のきみへ

幼稚園の入園式の日、はじめて父さん、母さんから離れて友達だけの中に入ったときの不安な表情を見せていたお前もすっかり声も低くなり、いつの間にかお母さんの身長も超して十五になるお前と話するとき、

お父さんも十五のころを思い出す。

卒業文集にそのころの青臭い夢を書いたこと

「夢を実現できる人間なんてホンの一握りの人間だけだ」
そう言う今のお前の方が現実的かもしれない……。

でもな、十五のころの夢は叶わなくても父さんは幸せだぞ。

お母さんやお前たちがいてくれる……。あのころにない夢がある。

自分のことをあきらめるな。自信を持って。

今を精一杯生きろ。

無駄な努力なんて何も無い。

すべてがお前を大きくする。

マイペースでもいいじゃないか、

お前はお前らしくゆっくり大きくなれ、

お前の夢に向かって。



読者からのたより

この感動を
きっと伝えなきゃと
この手紙を書きました。

はじめまして。私は鹿児島市立〇〇中学校3年の☆☆と申します。

今日、学校で「こころの言の葉 ～第6集 伝えたい思い～」が配られました。いつもはパラパラッとめくって「あー。」だの「ふーん。」とか言ってポイッと親に出していた冊子を、何故だか今年は、たくさん涙を流しながら読みました。

ページを開くたびに、目から涙があふれてきたのです。

なかなか口には出せない親の思い、子どもの思いが赤裸々に綴られていて、「ふっ」と笑いがこみ上げてきたり、胸をぐっとしめつけられたりしました。

私と同じ歳、年代の子たちがいろいろなことを考えていて、それ以上に親もいろいろなことを考えているんだなあと感じました。親だって子どもだって人間です。時には自分に嘘をついてみたり、時には素直でいてみたり、心は誰にもわかりません、自分以外は。

こうして、「こころの言の葉」を書くことによって、自分の心と向き合ったり、他人のものを読むことによって、親や周りの心を感じたりできるんだなど、感動しました。

これからいろいろな壁にぶつかってしまうことが多いと思います。その時に自分の心を見つめ直し、自分に素直に、そして困ったときは、もっと親に頼ってみようかなと思います。きっと一緒に悩んで一緒に解決してくれるような気がします。

「こころの言の葉」、読んでいて心がほっと温かくなりました。

この冊子、大切にします。これからも「こころの言の葉」続けてください！

きっと自分の子どもができて、この言の葉の用紙を持ってきたときは、私の心を書いてあげようと思います。

頼みましたよ！

2009.2.5